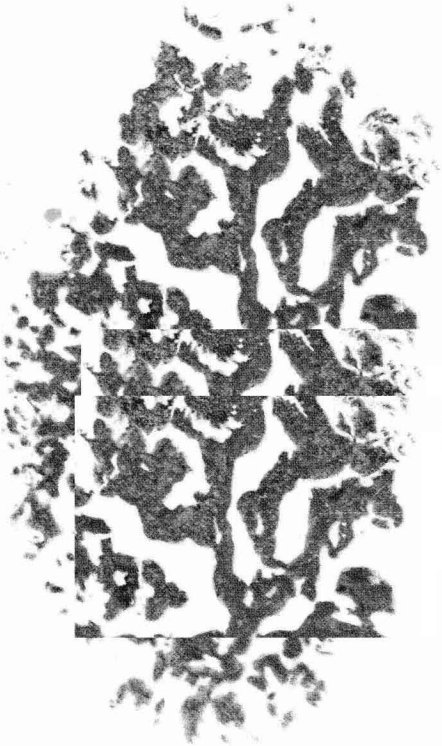
忘却の河

福永武彦



新潮社版

● 忘却の河

定価　380 円

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

昭和三十九年五月二十六日印刷
昭和三十九年五月　三十　日発行

著者　福永武彦

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社金羊社

株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(代)
振替　東京　八〇八番

乱丁・落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

〈神田加藤製本〉

忘却の河　目次

一章　忘却の河……七
二章　煙　塵……七一
三章　舞　台……二二
四章　夢の通い路……二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

五章　硝子の城……一七五
六章　喪中の人……二〇五
七章　賽の河原……二二七
あとがき……二七四

装幀　岡　鹿之介

忘却の河

一章　忘却の河

レーテー。「忘却」の意。エリスの娘。タナトス（死）とヒュプノス（眠り）の姉妹。また、冥府の河の名前で、死者はこの水を飲んで現世の記憶を忘れるという。

「ギリシャ神話辞典」

私がこれを書くのは私がこの部屋にいるからであり、ここにいて私が何かを発見したからである。その発見したものが何であるか、私の過去であるか、私の生きかたであるか、私の運命であるか、それは私には分らない。ひょっとしたら私は物語を発見したのかもしれないが、物語というものは人がそれを書くことによってのみ完成するのだろう。ひょっとしたら私はまだ何ひとつ発見せず、ただ何かを発見したい、私という一個の微小な生きものが何を忘れ何を覚えているか、もし忘れたとしたらそこに何の意味があり、もし覚えているとしたらそこに何の発見があるかを知りたいと望んでいるだけのことかもしれない。それはつまりこの部屋のせいなのだ。この部屋の内部に閉じ籠っていると、ふと私が私ではなくなり、まったく別の第三者のように見え始めるのだ。そうすると私は「彼」の中に私の知らなかった別の人間を発見したような気になる。まるで彼が既に死んでしまった人間であるかのように。死んだ人間に向かって、なぜ生きているのか何のために生きているかと訊いてみたところで、ノンセンス以外の何ものでもないだろう。私が発見したとか発見したいと望むとか言っても、実はそれはみな空しいことかもしれない。

しかし、これは部屋のせいだった。それは私の部屋と言えるような、言えないような、貧しいアパートの一室である。部屋は六畳一間きりで、入口のところに沓脱ぎの狭い土間があり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

下駄箱の上にガスコンロが置いてある。小さな流しもある。部屋の中はがらんとしていて、真中に安物の卓袱台があり、そこに私が今、原稿用紙をひろげてこれを書いている。私の真上に裸電球がぶら下り、壁と、押入の襖と、窓に懸った花模様のプリント地のカーテンとを照らしている。私は時々立ち上って、そのカーテンを開きに行き、がらがらと厭な音のする硝子戸を引いて冷たい夜風に吹かれ、すぐ下を流れている掘割の澱んだ水の臭いを嗅ぐ。私の下の部屋は近頃はいつも電燈の点いていたためしはないが、私のいるこの部屋も、掘割の向う岸の道を歩く人から見たら、まず、いつでも真暗だろう。それほどたまにしか私はこの部屋に来ないのだが、しかし道を歩く人は夜になると数えるくらいしかいないから、私は窓の張出しに腰を下してその手摺に凭れていても、人に見られるのをびくつく必要はない。私はよく調べたわけではないから掘割といってもどこかの河の支流なのかもしれないが、だいぶ先の橋のたもとに一つだけぽつんと立っている街燈の灯が水の表を照らしても、濁った鼠色はいつまでも紙屑や藁束や、それに何だか見分けもつかない汚ならしい塵芥を浮べたまま、ちっとも流れて行くようには見えない。従って窓を開いても水の流れる音がするわけでもなく、ただ鼻につんと来る腐ったような動物的な臭いに悩まされるだけなのに、私はここに立って、ぼんやりと掘割を眺め、人の通らない向う岸の道を眺め、それから橋のたもとの街燈の灯を眺めて、空っ風に首筋がぞくぞくして来るまで、あれこれと考えているのが好きなのだ。すると不意に私は何かを発見したような気になるのである。

私は卓袱台に凭れ、部屋の中を見廻すが、あの女は洗いざらい自分のものを持って行ったわ

けではなかったから、今でも窓に懸った薄地のカーテンの他に、ハンガーが二つ、壁に貼った映画スターの写真、それにこの脚のぎしぎししている安物の卓袱台、今私の敷いているけばけばしい色彩の座蒲団などが部屋に残っている。押入の中の夜具とか、私が手をあぶっている電気火鉢なんかは、私があとで買ってここへ運ばせたものだ。それから薬罐とか急須とか湯呑茶碗とかも女の残して行ったものだ。この茶碗は縁の方が少し欠けていて、運悪く唇がそこに当るとざらざらする。

私は何かを書こうと決心し、ここへ来る途中の文房具店でありあわせの原稿用紙を三帖ばかり買って来た。万年筆はパーカーで、これは私が社長室のマホガニイのテーブルの上で書類にチェックしたり小切手に署名したりする時に使うのと同じ万年筆だ。私は少し書いてみて、馴れないことなので直にくたびれる。何を書くつもりだったのかすぐに忘れてしまう位だ。そして茶を入れてゆっくりと味を愉しむが、この欠け茶碗で飲む茶の方が、秘書が恭々しくお盆に載せて運んでくれる蓋つきの有田焼の焼物で飲むよりも、よほど風味のあるような気がする。それは勿論私の方が湯加減などに詳しいためだが、一つには今の私が何ものにも捉われないでいられるせいだろう。私はここで一人きりだ。誰も私がここにいることを知らないし、妻や娘たちが知ったら、とんでもないパパだと一層信用をなくしてしまうだろう。会社の者たちが知ったら、無理もないことだ、それ位は当然だ、とかえって私に同情してくれるかもしれない。しかし彼等が同情するようなものは何もありはしない。私はここに女を囲っているわけではない。私は一人きりで、たまにここに来て誰もそのことを知らないと思うだけで気持がほぐれて

来るのだ。それは私の秘密といったものだろう。

あら社長さん何かいいことでもあるんですか、と秘書が茶を運びながら私に言った。どうして。だって一人で笑っていらしたもの。近頃の娘というのは馴れ馴れしいもので、機会があれば自分の存在を認めさせようとする。私はこの女子大出の才媛とかいう秘書が、現代向きの美人の一種であることは認めるが、あまり好きではない。君のところの女秘書はなかなかの尤物じゃないか、と訪ねて来た友人などが声を潜ませて私をからかいたそうな様子を見せることもあるが、私が取り合わないために、君は真面目だからなあ、ときに奥さんの具合はどうだい、と友人の方で先に折れてしまうのだ。この女秘書のどこが気に入らないのか、年頃から言えば娘の美佐子と同じ位だろうが、如何にも女子大出だと言わんばかりの、才気ばしった、押しつけがましい、自我のかたまりみたいなところが、古風な私の感覚に一種の脅威のように映るのだろう。私は何も真面目一点ばりの、亭主の見本のような男ではない。妻が十年も寝たきりでいるような亭主は、ついふらふらとなりそうな気持をいつでも持っている。現にその時でも、私が何を思い出し笑いしていたのか分ったものではない。

しかしその時、私は如才なく、笑ったつもりじゃなかったのだが、いま面白いものを見たんでね、と言った。秘書はあたりを見廻したが、テーブルの上に書類が置かれ、ソファの上に新聞紙が散らばっているばかり、社長室の中は私ひとりで客もいないから、何でしょう、と秘書は眼をきょろきょろさせながら自分でももう笑いかけている。教えようか、と私も気易くなって、椅子から立ち上り窓の方へ歩いて行き、ここに今さっき鳩が二羽来ていたんだ、と教え

た。鳩ですって。そう鳩さ、こんな高いところまでよく飛んで来たものさ。それが窓枠に二羽並んで、硝子ごしに私の方を見てひそひそ話をしていたのでね。まあ、と秘書は大袈裟に頷いて、何て言ってましたの、とうっとりしたような顔で尋ねたが、そういう人の気を惹くような質問のしかたが私には面白くないのだ。可哀そうな社長さんとか何とか言ってたんだろう、二羽で仲良くキスをしていたからね。

秘書は不意に赧くなり、社長室の奥まった窓際に倚り添って立っていることを危険に感じたのか、あら、と口の中で叫ぶなり、すうっと部屋を出て行った。安心しろ、己は君のような上品ぶったBGにはちっとも気がないんだ、とその背中に向けて叫び出しそうな気持になっていながら、私は秘書の若々しい耳朶が桜貝のように光っていたとか、眼許に媚を含んだ小皺が寄っていたとか、身のこなしに処女らしい機敏さがあったとか、そういうことを一人きりになってからもまだ詮鑿していたが、すると不意に、さっき私は一人で思い出し笑いをしていたのだろうか、自分ではそんな気もしないのに人が私を笑っているように見たというのは、二羽の鳩が窓枠に来ているというそのことで、私が何やら幸福そうな気分になっていたせいだろうか、と考え始めた。確かに息を凝らして鳩の動きを見詰めながら、私は何かを思い出しそうになっていた。そこに秘書が茶を持ってはいって来たのだ。その日一日じゅう私は機嫌が悪くて、小さなミスを見つけては若い社員を代る代る呼びつけてぶつぶつ言っていた。

私は自分が社長であることを自慢らしく書いたようにも見えるが、戦後に営々として苦労をしたあげくやっと作り上げた会社で、ほんのちっぽけなものだ。六階建ての貸しビルのその五

階と六階とを占めて、営業成績の方はそう悪くはないが、しかし私が十年前ころの、つまり妻が病気で倒れる以前の頃の、あの無我夢中の活動力を失ってしまったことは確かなのだ。それは年のせいなのか、それとも何か他に理由があるのか、私にはよく分らないが、私はしばしば社長室の窓の前に立ち、真下の電車通りの向うに、こちらよりぐんと高く聳えている十階建てのモダンなビルとか、その隣の私のところから見下せる背の低い建物の屋上でボール遊びをしている事務員たちとか、料理店の汚ならしい屋根に出っ張っている物干台とか、それからスモッグで曇った空とかを眺めて、自分が今ここにいることを忘れてしまう。すると不意に記憶というほどの明かな形を持つのではない過去の時間の流れが、灰色に濁ったまま、私の頭脳の中に逆流して来る。それは頭脳を充し、その中にきれぎれに未練がましい情景を浮ばせることもあるが、私は大抵は、意志的にそれを追い払おうとする。この意志的にということが大事なのだ。そういう訓練を続ければ、人は厭なことを忘れることが出来る。ただ時々、私の意志を無視して、過去の私が第三者のように私の前に立ちはだかって来ることがあって、それが私には恐ろしいのだ。

本当を言えば、私は未練を持ちながらでなければ生きることの出来ないような人間なのだろうか。あの時ああいうことがなかったらという仮定は恐ろしい。勿論世間一般の人はそうではないのだろうし、彼等は何の屈託もなく、晴れ晴れと毎日を送っているように見える。私の附き合っているような連中は、中共貿易の見通しとか、株の上り下りとか、ゴルフのハンディがどうだとかいうような表向きの会話の蔭に、それぞれの生活の皺を額に刻みながら暮らして

いるのだろうが、さて本心はどうなのか。この人生は失敗だったと未練がましい気持を持ち、強いてそれを抑えつけて、如才なく取り繕いながら生きているのか。いや彼等には生活は一定の方式に従って歯車のように廻転しているのだろう。欲望の小さな愉しみが無数に重なり合って、過ぎて行った時間の空しさに気がついた時には、もうすべてが遅すぎて結局は人間であることを忘れていた時だけが愉しかったと、最後に、意識の溷濁(こんだく)した境にあって、思い出すことになるのだろう。しかし思い出したからといってどうなるものか。彼等が幸福なのは思い出さないことにあったし、その瞬間まで忘れていられればこそそれだけ幸福だったというものだ。私も亦、人間であることを自分に問い続けることの無意味さを知っているから、自らに記憶を禁じて、自分を機械に仕立てて来たつもりだ。しかし人は生きながら、意識の中に死の溷濁を持つこともある。彼はそういうふうに生れついている。

それはまずこういうふうに始まったのである。夏の終りというよりも秋の初めで、今年はあまり大物の台風は来なかったが、それでも一晩大いに吹き荒れたことがある。朝になって風もやや収まり、この分なら学校もあるだろうと下の香代子を連れて、美佐子と女中とに見送られて表へ出た。その前の晩私は遅く帰宅し、その少し前に停電になったとかで蠟燭の灯で照らし出された妻の顔はひどく不機嫌そうで、こんな台風の晩にどんな用があったのだと執拗に問いつめられたが、私はそういうことには馴れているので妻の寝床の側でトランジスターラジオの台風情況などを聞きながら、風音と時折激しく吹きつける雨の凄じさに耳を澄ませて、いつしか妻が寝息を立てるようになっても私の方は殆ど睡眠を取っていなかった。そこで通りへ出てタ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.